

# 歐陽詢「九成宮醴泉銘」の書法

——「九成宮醴泉銘」にみる楷書の字体の特色について——

吉沢 義和

はじめに

書を学ぼうとするとき、ことに初学者はまず楷書から入るケースが多い。(ここでのいう楷書とは、狭義の古碑帖に見られる楷書を意味する。楷書より後に完成をみた活字体と区別するためである。)

その際、誰もが経験したであろう、碑や法帖の字体

が日頃見慣れた活字体とは点画の構成が異なる場合があることによるとまどいである。例えば、九成宮醴泉

銘を臨書しようとする場合、冒頭の「宮」字は第七画の短い左払いを表現していないが、これでよいのだろうか、というようなことである。このような疑問は、釈文の活字体と対比しながら臨書していくと、数限り



なくたくさんの事例をみるのである。このようなことから、楷書を学ぶには、楷書の字体の特色についての知識を備えておくことが必要となる。そうでないと、ただ機械的に点画を追うこととなり、欠けた部分や文字を正しく表現することができない。

そこで、古来、楷書の極則といわれている「九成宮醴泉銘」に楷書の字体の特色を求めてみようというわけで、九成宮醴泉銘の文字を部首別に整理し、楷書の字体の特色を考察した。

なお、後述中、例えば、検<sup>%</sup>は、『九成宮醴泉銘最善拓本』（清雅堂）の第五頁の第二行を示す。

### 楷書の成立

絵文字、符号から生まれた漢字は、殷周時代の古文（甲骨文・金文）を経て、やがて篆・隸・草・行・楷という順で五種の書体をみるに至る。というわけで、楷書は、最も遅く成立した書体である。「楷」とは、「のり（範）」「法式」の意味をもっている。従って、楷書とは、その時代の範となるべき正式の書体を意味する。現在の楷書が使われ出した頃は今隸<sup>かんれい</sup>とか楷隸を称して

おり、八分（隸書）を楷書と呼んでいたようである。唐の張懷瓘の撰による『書断』（古来の書体及び能書人を記したもの）には「八分本謂之楷書」とある。このことから、楷書は隸書から発生したものであることがうかがえる。「谷朗碑」（呉の鳳凰元年、AD二七二）では、横画の波磔（横画の収筆を右に大きくはねあげるように抜いている筆法）が見られず、「郭休碑」（西晋の泰始六年、AD二七〇）では、横画の起筆が藏鋒ではなく、露鋒で楷書らしい筆使いをみせている。また、泰始五年（AD二六九）紀年のある木簡、「諸仏要集経」（元康六年写、AD二九六）をみると、文字の結構も縦長になり、隸書の書風から抜け出ているとみられる。

四世紀中葉になると書聖王羲之の「楽毅論」「黄庭経」などが登場することになるが、王羲之の真蹟は殆んど存在しないために、王羲之の書は信憑性に乏しいと言われるが、現在の通説からして王羲之ははずすことはできない。

五世紀末頃になると、楷書による刻石や墨蹟が多く見られるようになる。そして、六世紀初頭、北魏王朝による碑や墓誌等の楷書が登場する。これを北魏体、

魏体、六朝体などと呼ぶ。

その後、次第に洗練され、隋が南北を統一し、唐が天下を安定させた時に現れた歐陽詢、虞世南は伝統的な書法の基盤の上に、美しい情趣を理知的な結構法に盛って楷書の典型を確立する。隋唐様式は主にこの二人の功績によって確立したが、書法、書風だけでなく文字の結体もおさまり、以後、楷書の標準と見なされて今日に及ぶのである。

歐陽詢、虞世南のあとには、初唐の褚遂良、中唐の顔真卿も個性的で優れた楷書を残している。

発生以降、およそ千七百年にも及ぶ長い歴史を有する楷書は、伝えられる書蹟を書法・書風の様式の面からみると、魏晋様式、北魏様式、隋唐様式、顔真卿様式の四つに大別することができる。

### 九成宮醴泉銘

唐の貞観六年（AD六三二）、歐陽詢七十六歳の書。魏の撰。整本を見ると、碑文は全二四行、毎行四九字、一一〇八文字（一説には一一〇九文字）で、碑石上部に篆額陽文で「九成宮醴泉銘」の六字が二行に井格で

囲まれている。これは歐陽詢の珍しい篆書例であろうか。一字の大きさは、縦は約二〜三cm、横は「日、王」などの約一、二cm、「歡」の約三、三cmと巾がある。文字の姿は、総じて縦長な字形が多く、その整齐さは見事というほかない。また、用筆・結体に狂いがなく、点画は引き締まっている。翁方綱（清・雍正二〜嘉慶二三）は、「これを要するに、その結体を合わせ、その章法を権れば、これ率更（歐陽詢のこと）が平生特に匠意を出せるの構、千門万户、規矩方円の至れるものなり、乃ち諸家を範圍し、百代を程式せる所以なり」と評している。

数ある歐陽詢の碑石の中でも、この九成宮醴泉銘だけが勅命による揮毫（勅書）である。故に、気持ちをおさえ、力を込めたものであるのか、心の躍動感を極力おさえたようなところがある。同じ歐陽詢の「化度寺塔銘」（唐の貞観五年、AD六三二の刻）とならんで歐陽詢の二代代表作だけでなく、古来楷法の極則として早くから喧伝されたがため、実に多くの人が旧趾を訪れ、拓本をとり続けた。碑石は長い年月の間の風化侵蝕、椎拓の過多により損壊があまりにもひどくなった。の

中には一部、研磨、加刻が施されるほどで、はたして原石の姿をどこまで止めていることであろう。多くの翻刻本が出ているが、今日では「李祺旧藏本」と「端方旧藏本」の二本がそれぞれ特徴をみせており、問題をかかえながらも書学者の好手本となっている。原石は、現在でも陝西省麟遊県九成宮村の天台山東麓の碑亭に納まっている。

### 「九成宮」の意味

九成宮とは唐代王室の離宮のことで、前述のとおり、今の陝西省麟遊県の奥深い山中にあった。もとは隋の文帝（楊堅）が楊素に命じて造営させたという仁壽宮のことである。造営にあたっては、地理的条件に恵まれていなかったことから難工事であったが、皇帝の財力と権力のもとに、開皇十三年（AD五九三）から二年の歳月を費やして築かれた大宮殿であった。

貞観五年（AD六三一）唐の太宗（李世民）はこれを修復し、九成宮と改め、離宮とした。つづく高宗（李治）は永徽二年（AD六五二）これを萬年宮と改め、「萬年宮銘」を建碑している。しかし、その年に大雨によ

る洪水にみまわれ、多くの犠牲者を出したことからやがて乾封二年（AD六六七）には再び九成宮にもどされた。

### 九成宮醴泉銘建碑の謂れ

このように、九成宮のあったところは山の中で地理的条件が悪く、特に水源に乏しかった。貞観六年（AD六三二）太宗が避暑に出向いた時のことである。太宗が皇后を伴い庭内を散策していると、偶然にも西方の一隅に潤いのあるところに気付き、杖でつついてみると水が滾々と湧き出てきた。これは唐王朝の徳を称える一大祥瑞であると判断し、この慶事を記念して、帝は碑の建立を命じた。

銘文は勅を奉じて魏徵が撰し、これを歐陽詢が書丹したというわけである。

魏徵（大成二（AD五八〇）～貞観十七（AD六四三））河北魏州曲城の人。字は元成また玄成という。少にして読書を好み、文章に長け、また詩をよくし詩人として名を成したが、書をもよくし、鑑別に長じた。

唐の高祖、太宗の二朝に仕え、とりわけ太宗の「貞

親の治」の際の功臣として名を残す。大唐一代の良宰相として知られる。六十四歳で歿し、文貞と諡された。太宗は大いに歎じて「銅をもつて鑑となす、衣冠を正すべし。古をもつて鑑となす、興替を知るべし。人をもつて鑑となす、得失を知るべし。徴歿す、われ一鑑を亡う。」と。太宗にいかに良く仕えていたかがうかがえる表現である。

九成宮の銘文は五十三歳の撰である。九成宮のすぐれた有様を四六駢儷体を基調として表現したもので、更に太宗の高徳、質素儉約のさまを褒めたたえ、醴泉の湧き出たことは明君の善政がもたらす天下泰平の瑞祥であると述べ、太宗の徳治を賛すとともに勸戒の言葉で結んでいる。

歐陽詢へ永定元（AD五五七）〜貞観十五（AD六四一）  
陳、隋から唐の初期にかけての官吏、能書家で、虞世南より一つ年長である。

その事蹟を新・旧唐書に依ると、次のように記されている。

「歐陽詢（AD五五七〜AD六四一）字は信本、潭州臨湘

の人。父歐陽紇は、陳の広州刺史（行政監察官）であったが、ある事件に坐して誅された。詢は、生来、矮軀醜貌であったが、たいへん聡明で、讀書するにいつも數行を一度に読み下した。そして博く學問を極め、隋に仕えて太常博士（儀礼を司どる官）となった。高祖が即位すると詢は給事中（皇帝の側近官）にのぼり、裴矩らとともに、「藝文類聚」一百卷を修撰した。詢ははじめ王羲之の書を学んだが、のち次第に書風が変わり、筆力の強さは当時比肩するものがなかった。人々はその尺牘などを手に入れると、皆、手本にしたという。高麗からも千里の道を遠しとせず、その書を重んじて使者を遣わしてその筆跡を求めてきたほどであった。

ある日かれは、路傍に晋代の名能書家索靖の書碑を見て、數歩行き過ぎたが、また戻り、その傍に三日泊まり、ようやく帰った、と。（このことは、歐陽詢の書の源流を探る資料の一つとして重視されるところである。）」

貞観年間の初め、太子率更令（皇太子のおもり役）に任ぜられた。ここで詢のことを「率更」と呼ぶので

ある。太宗は弘文館を設け、学生を選んで書法を研究させることにしたが、詢は虞世南とともに第一流の能書家として、その学士（教官）も兼ね、後進の指導にあたった。のち渤海男の爵位を与えられ、貞観十五年、八十五歳で歿した。

（通例と考えられる字体）

（一）ほぼ活字体に近い字体

僉一魚、檢<sup>5/2</sup>、儉<sup>3/1</sup>、驗<sup>3/1</sup>、靈<sup>5/2</sup>

亢一亢、抗<sup>3/1</sup>、行書に多くみられる。

𠃉一ヨ、崢<sup>3/1</sup>、淒<sup>5/2</sup>、事<sup>2/1</sup>

余一余、徐<sup>5/2</sup>、塗<sup>2/1</sup>

回一回、廻<sup>3/1</sup>、圖<sup>4/2</sup>

間一間、潤<sup>5/2</sup>、むしろこれが正字。

匕一匕、北<sup>3/1</sup>、昆<sup>3/1</sup>

戸一戸、戸<sup>5/1</sup>

𠃉一𠃉、肅<sup>3/1</sup>、楷、行、草ともに出ない。

厂一厂、疾<sup>3/1</sup>、俯<sup>3/1</sup>、循<sup>3/3</sup>、痼<sup>3/3</sup>

曾一酋、猶<sup>3/1</sup>、醴<sup>3/3</sup>

尙一尙、弊<sup>3/1</sup>

口一ム、損<sup>2/1</sup>、遠<sup>5/3</sup>、曩<sup>1/4</sup>、國<sup>3/3</sup>、寔<sup>4/3</sup>

悦<sup>4/2</sup>

𠃉一𠃉、昔<sup>3/2</sup>、腊<sup>1/2</sup>、惜<sup>3/1</sup>、華<sup>4/4</sup>

女一支、至<sup>5/2</sup>、支となる場合も。

步一歩、歩<sup>3/3</sup>

又一又、度<sup>2/1</sup>、度の場合、又を女に作るのが通例。

𠃉一𠃉、鶚<sup>3/4</sup>、鳳<sup>4/2</sup>

屯一屯、純<sup>3/1</sup>

𠃉一𠃉、録<sup>4/1</sup>

𠃉一𠃉、高<sup>4/1</sup>、亨<sup>2/1</sup>、停<sup>4/1</sup>、淳<sup>5/1</sup>

𠃉一𠃉、禍<sup>4/1</sup>、𠃉とも。

𠃉一𠃉、亂<sup>4/2</sup>

𠃉一𠃉、旨<sup>4/1</sup>

兼一兼、兼<sup>3/1</sup>、謙<sup>4/3</sup>

（二）活字体の姿からかなり離れている字体

𠃉一𠃉、𠃉、殿<sup>7/3</sup>、毀<sup>3/1</sup>、殺<sup>3/1</sup>、𠃉<sup>3/4</sup>、

聲<sup>4/1</sup>、般<sup>4/2</sup>

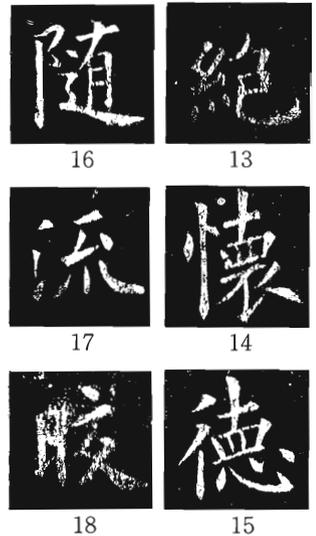
𠃉一𠃉、𠃉、跨<sup>7/4</sup>

分一分、分<sup>7/4</sup>、粉<sup>2/4</sup>





16 随<sub>4</sub>、「膏」の「工」の省略。  
 17 流<sub>2</sub>、旁の第一画の省略。  
 18 皎<sub>3</sub>、「白」の第一画の省略。



(四) 活字体とは違うが通例となっている字体

經<sub>14</sub>、速<sub>4</sub>、儀<sub>11</sub>、堯<sub>11</sub>、甚<sub>12</sub>、垂<sub>2</sub>、  
 陰<sub>24</sub>、微<sub>2</sub>、湛<sub>34</sub>、卿<sub>34</sub>、取<sub>31</sub>、策<sub>34</sub>、  
 勒<sub>40</sub>、舜<sub>42</sub>、潛<sub>43</sub>、類<sub>44</sub>、赫<sub>45</sub>、黃<sub>43</sub>、  
 滿<sub>53</sub>、

(五) 漢隸以来、図のように作るのが通例となっている字体

鹿<sub>3</sub> (麗<sub>23</sub>)、巖<sub>8</sub>、關<sub>8</sub>、建<sub>8</sub> (之にも作る)、參<sub>8</sub>、  
 臨<sub>9</sub>、四<sub>12</sub>、兆<sub>13</sub>、皆<sub>14</sub> (階<sub>21</sub>)、縣<sub>15</sub>、屢<sub>17</sub>、肯<sub>18</sub>、  
 舊<sub>14</sub>、壁<sub>24</sub>、往<sub>24</sub>、訓<sub>24</sub>、此<sub>24</sub> (紫<sub>29</sub>)、朔<sub>26</sub>、  
 亥<sub>26</sub>、歷<sub>26</sub>、覽<sub>26</sub>、西<sub>24</sub>、厥<sub>26</sub>、導<sub>26</sub> (草、行にも

用例多い)、雙<sup>21</sup>、寶<sup>31</sup>、宜<sup>32</sup>、庭<sup>34</sup>、壽<sup>35</sup>、師<sup>35</sup>、沈<sup>36</sup>、所<sup>36</sup>、美<sup>36</sup>、契<sup>43</sup>、介<sup>42</sup>、明<sup>43</sup>(扁はもと固(まど)に作る)、五<sup>45</sup>、烏<sup>45</sup>、茲<sup>54</sup>、吉<sup>54</sup>(吉の俗字)、勅<sup>54</sup>

(六)篆書の字形を遺したと考えられる字体  
19 蓋<sup>36</sup>、20 墜<sup>36</sup>(部首は「土」)、21 男<sup>36</sup>



19



20



21

(七)活字体に加筆された字体

22 監<sup>36</sup>、ミの部分に横画を加えた。(檻<sup>36</sup>)  
23 鉅<sup>36</sup> 巨の下部に点を加えた。(拒<sup>36</sup>、渠<sup>36</sup>、矩<sup>44</sup>)  
24 譯<sup>36</sup>、羊に横画を加えて羊にした。(澤<sup>36</sup>)  
25 土<sup>36</sup>、最後に点を加えた。(漢隸の土と区別するため。)

(氏<sup>41</sup>)

26 京<sup>36</sup>、横画を加えた。(景<sup>36</sup>、涼<sup>36</sup>)  
27 辟<sup>36</sup>、横画を加えた。(避<sup>64</sup>、壁<sup>92</sup>、關<sup>43</sup>)  
28 逕<sup>44</sup>、房の頭に左抜いを加えた。

29 潔<sup>44</sup> 力の中に一画加えた。



22



25



28



23



26



29



24



27

(八)点画を省略することにより、字形を変えた例  
30 襲<sup>44</sup> 旨の中の三つの画を省略し、衣の中に入れた。なかなか妙である。



30

(九) 点画の連続が行われた例

31 交 $\frac{1}{2}$ 、第四画と第五画の連続。(效 $\frac{1}{2}$ )

32 憂 $\frac{1}{4}$  心の第四画の点と次の第一画の左抜きの連続。

(慶 $\frac{1}{2}$ )

33 後 $\frac{1}{2}$  ムの点と次の第一画左抜きの連続。

34 佳 $\frac{1}{4}$  圭が草書の運筆に従い、横、縦、横、横、横に作る。

35 遠 $\frac{1}{4}$  口をムに省略したそのムの点と下のムの第一画左抜きの連続。(この字形多し。)

36 列 $\frac{1}{4}$  旁の第二画と第三回の連続。

37 引 $\frac{1}{4}$  弓の第二画と第三画の連続。(窮 $\frac{1}{2}$ )

38 養 $\frac{1}{4}$  羊の縦画と食の第一画左抜きの連続。

39 元 $\frac{1}{4}$  第二画と第三画の連続。(冠 $\frac{3}{4}$ )

40 安 $\frac{1}{2}$  第一画と第四画の連続。「が先となる。(案 $\frac{3}{4}$ )

41 知 $\frac{1}{2}$  第一画と第二画の連続。(矩 $\frac{1}{4}$ 、智 $\frac{1}{2}$ ) この運筆は(無 $\frac{1}{4}$ 、邇 $\frac{1}{2}$ )など。

42 祉 $\frac{1}{4}$  第二画と第四画の連続。示は殆んどこの運筆になる。

へその他の字体

(一) 同じ字で違った結構のある例

43 四、 $\frac{3}{2}$ と $\frac{1}{4}$ 。44 下、 $\frac{1}{2}$ と $\frac{1}{3}$ 。45 無、 $\frac{1}{2}$ と $\frac{2}{3}$ 。

46 功、 $\frac{1}{2}$ と $\frac{1}{4}$ 。47 遠、 $\frac{1}{3}$ と $\frac{1}{2}$ 。48 丹、 $\frac{1}{4}$ と $\frac{2}{3}$ 。

49 糸、 $\frac{1}{2}$ と $\frac{2}{3}$ 。50 鑑(鑑に同じ)、 $\frac{2}{4}$ と $\frac{3}{2}$ 。



40



37



34



31



41



38



35



32



42



39



36



33



57 懷、  
 $\frac{37}{1}$ と $\frac{42}{2}$ 。  
 54 其、  
 $\frac{28}{2}$ と $\frac{50}{1}$ 。  
 51 聖、  
 $\frac{23}{3}$ と $\frac{36}{1}$ 。



58 不、  
 $\frac{37}{3}$ と $\frac{46}{4}$ 。  
 55 出、  
 $\frac{32}{3}$ と $\frac{39}{4}$ 。  
 52 上、  
 $\frac{25}{2}$ と $\frac{47}{2}$ 。

46

45

44

43

59 斯、  
 $\frac{40}{1}$ と $\frac{41}{1}$ 。  
 56 以、  
 $\frac{36}{3}$ と $\frac{50}{2}$ 。  
 53 乃、  
 $\frac{28}{1}$ と $\frac{44}{4}$ 。



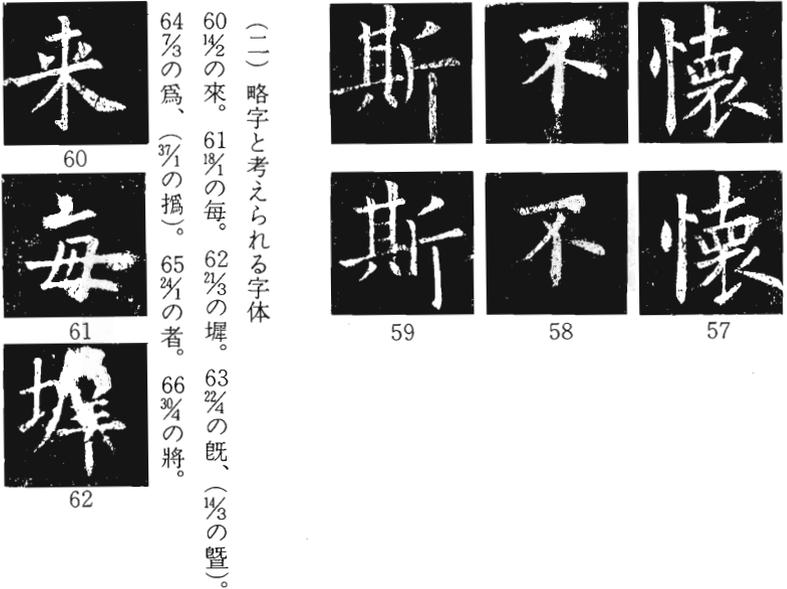
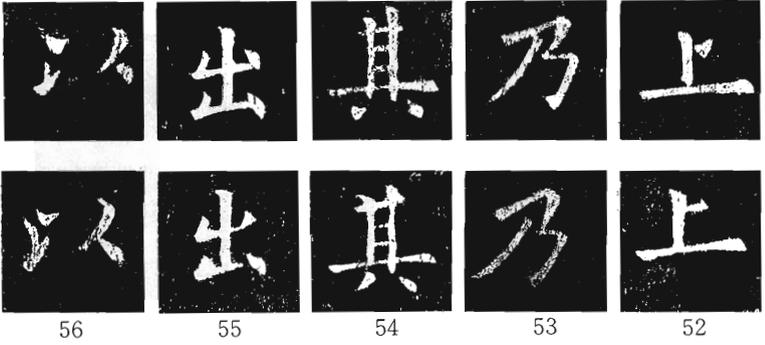
51

50

49

48

47





70



67



71



68



72



69



66



63



64



65

(三) 俗字と考えられる字体

67%の鬱の図。68%の胛の図。69%の郡の図、(正字は羣)。70%の閑の図、このほか下、午にも作る。71%の映の図。72%の戒の図。



73

(四) 諷字と考えられる字体。

73%の本の図。この図は別字としてある。

(五) 異例と考えられる字体

74%の檢の図、木を手に作る。ただし、他に用例あり。

(5%の校の図)

75%の勝の図、旁を草書風に作る。

76%の邇の図、旁は楷書の通例だが、偏をんに作るの

は珍しい。

77%の壯の図、旁は楷書の通だが、偏の士を土に作っ

ている。

78%の既の図、目の点を忘れたものか。

79%の房の図、用例が少ない。漢隸に依る字形と考

るべきか。

80%の乾の図、偏の中央部の日の中の縦画は誤りであ

る。臨書の際は不要。

81%の雜の図、偏は業や彳に作る用例はあるが、図の

用例は珍しい。



74



77



80



75



78



81



76



79

結び

古来、楷書の極則と言われている「九成宮醴泉銘」

にみられる楷書の字体の特徴をいろいろな角度から考察してみた。このたびは、基礎的、基本的なとらえ方をしてみた。なるほど、秀麗、整齊な点画と結体は楷書の極則であることを改めて痛感した。書学者にとつて第一の関門であると考ええる。

できるだけ客観的に考察したつもりである。「九成宮

醴泉銘」の第一歩を踏み出したといえるところである。

これからは「九成宮醴泉銘」の真髓にとどくよう研究を進めてみたい。それには、いかにしたら最高の拓本を手にすることができるか、これから追い求めてみたい。

参考文献

- 1 廣瀬保雄 一九九〇 原寸大精印 九成宮醴泉銘 最舊拓本 清雅堂
- 2 鈴木春視 一九三八 新講書道史 東洋圖書株式會社
- 3 下中邦彦 一九六六 書道全集7 平凡社
- 4 藤原楚水 一九七四 図解書道史 第三卷 省心書房
- 5 鈴木翠軒・伊東參州 一九七八 新説和漢書道史 東京淡雅會
- 6 余雪曼 一九九二 書道技法講座〈楷書〉九成宮醴泉銘 二玄社
- 7 芸術新聞社 一九八八 墨 第七二号
- 8 芸術新聞社 一九九二 墨 第九五号

- 9 藤原宏 他 一九七八 書写・書道用語辞典 第  
一法規
- 10 中西慶爾 一九八一 中国書道辞典 木耳社
- 11 諸橋轍次 一九六八 大漢和辭典 第一卷、第十  
二卷及び索引 大修館書店
- 12 法書会出版部 一九六七 五體字類 西東書房
- 13 伏見冲敬 一九七四 書道大字典 角川書店
- 14 伏見冲敬 一九七七 書道字典 角川書店
- 15 藤原鶴来 一九九一 新書道字典 二玄社
- 16 角井博 他 一九九三 中国法書ガイド  
九成宮禮泉銘 唐 歐陽詢 二玄社
- 吉 沢 義 和